

最優秀賞

教師の魅力は「メダカのはなこ」

熊本県立鹿本商工高等学校3年 後藤 華乃

「不登校の私に声をかけて。」

ChatGPTにお願いしてみると、瞬時にこんな文章が返ってきた。

「不登校でいることは、ダメなことでは全くないんだよ。むしろ、自分の心を守ろうとしている証拠だと思う。学校に行くだけが人生じゃないし、今の時間は自分を見つめるための大切な時間もあるんだ。」

AIが書いたとはとても思えない温かい言葉。不登校に苦しんでいる人が先生にこう言ってもらえたから、きっと救われるに違いない。教師がAIでなく、人間でなければならない理由はなんだろうか。

AIが教師という仕事を担った場合を考えてみる。知識量やミスの少なさでは、人間はAIに到底及ばない。また、生徒に上手く寄り添うことだって、もはやAIの方が上かもしれない。なぜならAIは、心理学や哲学、教育学といった膨大な情報に一瞬でアクセスし、何を言つたらいいのかという最適解を即座に正しく導き出せるからだ。やはり、人間は教師という仕事に向いていないのだろうか。

中学二年生の冬、私は教室に行けなくなった。いじめられていたわけでも、仲間はずれにされていたわけでもない。友人は変わらず仲良くしてくれたし、別室にいる私を気遣ってくれた。何でもできる妹に劣等感を抱いた。一度劣等感を抱くとそれはなかなか私の中から消えてくれないので、いろいろなものが私を追い詰めているような気がして、死にたくなった。

別室登校は続いた。毎朝、たくさんの先生が私のいる学習室に足を運び、体調などを聞いてくる。

「なんばしょっとね。教室いくばい。」

「今日は教室行くとだろ？ 甘えてばっかじやいかんけんね。」

そんな風に言う先生もいた。せっかく声をかけてもらったのに応えられない。せっかく教室に呼んでくれているのに行くことができない。そんな自分の情けなさに、より気を落としてしまうこともあった。

そんな中で、救われた言葉があった。学習室で飼っているメダカ達を眺めていた時だ。学習室常駐の先生がこう声をかけてくれた。

「かわいいど？ 名前なんだと思う？ …全部はなこ。」

私は何だか急に肩の力が抜け、思わず笑ってしまった。この先生は、私が教室に行けなくて泣いていた時、「行かんでいいよ、ここにおっていいからね。」と言ってくださった先生だった。

この「メダカのはなこ」は、絶対にChatGPTからは出てこない言葉だ。私の見ているものを、同じ空間で見つめている人間でないと言えない言葉。すぐれたAIがどんなに「最適」な言葉をくれたところで、それは生の私を見て作られた言葉ではないのだ。

担任の先生の言葉も忘れられない。

「今日も頑張ってきたね。今日はここおると？3時間目は俺の授業だけん、来れるならおいで。」

もし同じ言葉をAIに言わされたとしても、きっとここまで心にしみることは無かったと思う。

毎朝学習室に顔を出し、私が自習をしていたらさり気なく前に座って教えてくれる先生だったから、実際の私を見て、私のためだけに発された言葉だから、胸に響いたのだ。

そう思うと、「教室に行け。」という言葉もまた、私に向けて発された言葉だった。現代の知見から言えば、不登校で苦しむ生徒に対する言葉としては、もしかしたら不適切なものかもしれない。私も当時は重荷に感じていた。しかし、目の前の私を何とかしてやりたいという思いのもと、その先生の価値観の中で、きっと悩みながら作られた言葉なのだ。「メダカのはなこ」や担任の先生の言葉だけでなく、当時は重苦しく感じた厳しい言葉もまた、楽しく学校に通えている今の私を支えている。

生徒から訴えがあった時、教師が答えを出すスピードはAIほど速くない。完璧な答えも準備できない。しかし、その逡巡する時間や「適切な回答」とのズレの中にこそ、教師が人間でなければならない理由がある。私のためだけに用意された精一杯の「答え」は、たとえその瞬間の耳障りは良くなくても、時間を超えて私に寄り添ってくれる。

「何を言われるか」ではなく、「誰に言われるか」が人の納得度を左右するという。生徒一人一人との関わりを積み重ねた上で発される言葉だから、人を育てることができる。生徒が何も言わなくても、生徒が見つめる先の「メダカのはなこ」と一緒に見つめることができること。それこそが教師という仕事の魅力だ。

今後、AIが想像もしない進化を遂げて教師に成り代わる時代がくるかもしれない。それでも、私を支え生かしてくれるのは、間違いなくあの先生達の「生きた」言葉だ。